

Broaden your horizons 60 ~さあ、視野を広げて!~



こんにちは。メディセレのしゃっちょう、スポーツファーマシストの児島恵美子です。

ロンドンオリンピック、たくさんのメダルが日本にもたらされた代わりに、皆さんの睡眠時間が減ったのではないのでしょうか？夏バテしていませんか？連日、熱戦が報道されましたが、報道されない裏の戦いもあります。それは、ドーピング戦です。

オリンピックにドーピングが導入されたのは、1968年メキシコ五輪からです。今年のロンドン五輪では、史上最多6,250人の選手から採取した検体が24時間体制で最新機器を駆使して調べられました。さらには、抜き打ちテストも実施されました。さらにさらにロンドン五輪では、今までの尿検査だけではなく、血液検査も実施されましたので、摘発が困難とされていた禁止薬物の検出もできるようになりました。そのため、何人もの選手から陽性反応が出るという残念な結果になりました。

実際、「どうやって検体をとるのかしら?」という素朴な疑問が私にはありました。それをスポーツファーマシストの勉強で知り、びっくり! 添付写真のようにリアルなんです! (公認スポーツファーマシストプログラムより抜粋)

「競技者と同性のドーピング・コントロール・オフィサー (DCO) 監視の下、尿検体を採取。監視の妨げになるズボンなどは膝下まで下げ、長い上着は脱ぎ、採尿の行程がDCOの視野に入るようにする (最小必要量90ml)。」

これ、出るものも出ませんよ!!!

尿を他人の尿とすり替え、ドーピング検査をかいくぐる、というのを聞いたことはありませんか? 有名なのはハンマー投げで、室伏選手のライバルだったアナシュ選手です。ドーピング違反で失格となり、繰り上げで室伏選手がアテネ五輪の金メダリストになりました。事前に採取した他人の尿を直腸に入れて検査をしたのですが、排尿量が最小必要量に足りず、発覚に至りました。他人の尿を直腸に入れるって……。ドーピングは選手生命を脅かすだけでなく、選手自身の健康をも脅かします。私たちに感動を与えてくれるスポーツ。それは不正なき、正々堂々の勝負だからこそ、感動が生まれるのだと思います。勝つに越したことはないけれど、負けた選手にもエールを送りたくなることがあります。一生懸命な姿に感動するのだと思います。私たち薬剤師は薬物の知識を持ち、競技者のよい相談相手となり、スポーツを支えていきましょう!